喜須来小学校「校長室だより」No.８　　令和５年10月６日発行

いのちいっぱい 感動いっぱい ～ ありがとうの旅を続けよう！～

10月に入り、一気に朝夕の気温が下がってきました。皆さん、健康維持に十分お気を付けください。

筋書きのないドラマ

毎朝、どのお家にも起こりうる筋書きのないアクシデントやドラマ。お家の方も子どもたちも、そのアクシデントやドラマを乗り越えて、仕事場や学校へと向かいます。しんどい日もつらい日も、人間ってすごいなあといつも思うのです。

さて、ある日の朝。いつものように集団登校を見守っていると、なんだか人数がいつもの数より少ない集団がいます。どうしたのかなあと思って聞いたのですが、「Ａくんのお腹の調子が悪くて…」とまで聞こえて、聴力が弱っている私にはその先が聞き取れなかったのです。でも、その聞き取れなかった部分は、後ですぐに確認できました。

いつも１年生のＡくんを迎えに行ってくれる３年生のＢさん。Ａくんのお腹の調子が悪かったので、トイレに行っている間、ずっと待っていてくれたのだそうです。Ａくんを一人で登校させてはいけないと思うがゆえのＢさんの判断でした。ＡくんとＢさんが登校してきた姿を見て、Ｂさんの上級生としての責任感を感じたのです。表通りの大きな動きしか見えていない私ですが、裏通りではＡくんとＢさんのようなすてきなドラマがたくさん繰り広げられているのだろうなと思うと、朝の筋書きのないアクシデントやドラマも、捨てたものではないなと思うのです。

いのちのバトン

右は、９月下旬、保内町と日土町全戸に配布された保内ブロック人権教育協議会主催「保内ブロック人権教育講演会」のチラシです。

この人権教育協議会は、八幡浜市民一人一人の人権尊重の意識を高め同和問題をはじめとする様々な人権問題の解決を目指すための組織です。決して、小・中学生だけが目指す人権教育ではありません。

今年度、数年ぶりに、この人権教育講演会の参加を一般市民の方々にこのチラシを通して呼び掛けることができました。本講演は、10月13日（金）午後１時30分から開催されますが、どなたでも無料で参加することができます。保護者、地域の皆さん、どうぞお誘い合わせの上、お気軽に参加してください。

保内ブロック人権教育講演会

田中良彦氏

「いま、つたえたいこと。」

2023年 10月13日(金) 入場無料 13:30～15:15

八幡浜市文化会館 ゆめみかん大ホール

主催 保内ブロック人権教育協議会 八幡浜市保内福祉会館

講師 田中良彦（たなか よしひこ）

1956年、長崎県北松浦郡生まれ。郷里・鹿町の役場職員を経て、長崎県公立中学校国語科教師として長年勤務した。学校現場では、人権・同和教育に情熱を注ぎ、子どもたちの心に寄り添い、「生きるとは何か」を問い続けた。出会った教え子たちの「生と死」に向き合う中で、また、多くのこどもたちと施設訪問を繰り返す中で、子ども達の「ものの叫び」を学び、そして伝え続けた。

その学びは、ゆがて講演・コンサート活動へと広がり、悩み多き子どもたちと向き合う多くの人々の心に届けていった。平成18年12月に行われた全国人権・同和教育研究大会愛媛大会での発表を機に、平成19年7月、初めて八幡浜の地を踏む。それが、八代中学校ＰＴＡ講演会「いま、つたえたいこと―生きること・学ぶこと・いのちのこと―」である。参加者一人一人にいのちの重さ、生きることの意味を投げ掛けた衝撃的なものであった。また、講演会後に行った中学生有志との施設訪問を機に、定期的に施設訪問を行い、自他のいのちと向き合う「八中いのちを伝え隊」が結成された。その流れは、やがて周辺部の中学校にも波及し、いのちと向き合う多くの「隊」が生まれた。その取組は、平成20年11月に行われた全国人権・同和教育研究大会奈良大会において、長崎県・大分県・愛媛県の３県合同報告として発表された。さらに、平成21年2月に行われた八幡浜市人権・同和教育研究大会でも、報告・講演により、市民の知るところとなった。

その活動の中から、八代中学校生徒による『あの場所で』という楽曲ができていった。協力・信頼・郷土愛に満ちた歌は、平成21年2月に、中学生たちの歌唱で、CD化され、今も当時の活動者たちを励ましている。

6年前に教職を定年後、定時制高校夜間部の教師となり、様々な人生を背負って歩み続ける若き命たちと向き合った。「生きるとは、生かされるとは。」その問いかけは今も変わらない。現在、伊万里市教育委員会生涯学習課、同和教育指導員兼人権教育指導員として、「いのちの意味」を問い掛け続けている。

講演会のお問い合わせは｜保内ブロック人権教育協議会事務局　喜須来小学校(℡36-0303)

※ どなたでも無料で参加することができます。事前予約も必要ありません。

さて、講演会講師、田中良彦氏は、2007年７月１日に八代中学校ＰＴＡ講演会の講師として、初めて八幡浜市の地を踏まれましたが、それ以来、八幡浜市の中学生を中心とした子どもたちと共に、様々な人権教育に携わられ、今に至っています。悩み多き子どもたちと教育的実践（老人ホーム訪問や話合い活動）をとおして、「生きるとは。生かされるとは。」を問い掛けて来られました。今日は、田中先生が、初めて八幡浜の地を踏まれた日、八代中学校「八中いのちを伝え隊」の生徒たちと共に、老人ホーム「湯島の里」へ訪問された際に、生徒代表の松本さんが入所者の皆さんの前で読んだ作文を御紹介します。各中学校に広がった「いのちの探究」活動は、この作文をきっかけとして始まったのです。

いのちのバトン

松本　祐季

相田みつをさんという作家の詩の中に、「いのちのバトン」という詩があります。

父と母で二人　父と母の両親で四人　そのまた両親で八人
こうして数えてゆくと　十代前で千二十四人
二十代前では？なんと、百万人を超すんです
過去無量のいのちのバトンを受け継いで　いま、ここに　自分の番を生きている
それがあなたのいのちです　それがわたしのいのちです

この詩を読みながら、今日、目の前のおじいちゃんやおばあちゃんに、私から何を伝えようかと悩みました。私が、今、ここで一人の人間として生きていられるのは、決して家族だけのおかげではなく、過去の長い歴史の中で生きてこられた一人一人の命によって、偶然にも生まれてきたのだと考えたとき、だれ一人例外なく、周りにいるみんなが、私の命を支えてきた人たちなんだと思います。おじいちゃん、おばあちゃん、私が生きているのは、おじいちゃんやおばあちゃんのおかげです。本当にありがとう。

私には、２年前まで大阪に住むおじさんがいました。駅員として働くことになっていたその春、おじさんをガンという病気が襲いました。思わぬ告知を受けたおじでしたが、あきらめることなく「必ず直って、仕事もして、電車の仕事がしたいな。」と語ってくれました。でも、私たちの願いもかなわぬまま、おじさんはそのまま逝ってしまいました。わずか30歳の春でした。私には、初めての身近な人の死でした。生きたくても生きることができない人がいます。いじめなどを受けて、自ら命を絶つ人もいます。その命を私たち周りにいる者たちが、一人でも多く救うことができたらと願います。生き続けることができない人の分まで、生きることができる私たちが、一人一人の命を守っていかなければならないのだと思います。

最近、私たちと同じ中学生が引き起こす問題が、社会問題として多く取り上げられています。私と年齢が変わらない人たちが、自分の家族から取り残されて自分自身を見失い、大人社会の中へ流されています。今、問題になっている「いじめ」の構造も、実は同じです。人を傷つけながら生きることを家族の中で学んできた子どもたちは、やはり人を傷つけ、けなしていくことで心の満足を味わうのだと思います。そして、互いに助け合うことを学ばなかった子どもたちは、その「いじめ」に立ち向かう勇気は持てません。逃げること、従うことだけを、大人たちから学んでいくのだと思います。世の中で起こっている若い世代の人たちの問題は、すべて大人の社会を反映しているものだと私は思います。残念でなりません。

私は、人間はみんな兄弟だと思います。それは、みんなのいのちのバトンを引き継いできたからです。ならば、命だけを引き継ぐのではなく、本当は心を引き継いでいかなければならないのだと思います。今日、私は、午前中、田中先生のコンサートを聴きながら、そんなことを思いました。いのちは引き継がれなければ、きっとつながるものは「生命」のみで「心」ではありません。おじいちゃんやおばあちゃんが、ここで一生懸命生きておられる。それを受け継ぐ私たちは、バトンをもらった人間として、人間の心を引き継いでいかなければならないのだと思います。

中学生が書いた作文とは思えません。私は、この作文を入所者の前で読む松本さんの姿を、今でもよく覚えています。八中いのちを伝え隊の子どもたちは、その後も訪問活動を続け、自分たちと向き合い続けました。その活動の中で生まれた曲が左の「あの場所で」という歌です。この歌は、やがて同じような活動を続けていた真穴中学校「真中いのち輝き隊」、保内中学校「保中いのちつなぎ隊」、三崎中学校「三中しあわせ運び隊」の活動の応援歌にもなりました。（歌は、講演会の中でも御紹介します。）

ゆめみかんで行われる本講演会は、大人も子どももみんなが、いのちの意味、人権の意味を共に考えるよい機会になると確信しています。どうか、一人でも多くの皆様に足を運んでいただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

喜須来旋風を巻き起こせ！

８月下旬から始まった陸上記録会の全体練習。10 月 10 日（火）の本番を前に、先日、記録会の選手が顧問から発表され、10 月２日からは、選手のみの強化練習に入っています。今年の陸上練習を見ていると、子どもたちの自主性が目立ちます。顧問の先生方も、その部分を重視しているのだと思いますが、練習メニューの把握はもちろん、自分たちの声で進めていく練習が、喜須来小の魅力ある練習風景だと感じます。その状態にたどり着くまでに時間はかかりますが、最近のスポーツ事情を見ている限り、「やらされる練習」から「やりたい練習」へと切り替えることが大切だと感じます。この１か月半、子どもたちはその練習方法でがんばってきました。きっといい結果が出る。私はそう感じています。がんばれ、喜須来小陸上部！喜須来旋風を巻き起こせ！